

井戸茶碗名義考

On the meaning of the name "Ido-zyawan"

堀 勝博

HORI Katsuhiko

はじめに

「一井戸二楽三唐津」⁽¹⁾「一井戸二楽三古萩」「一井戸二萩三唐津」のように、いかように並び称せられても、常に最高位の茶碗として評価されるのが井戸茶碗である。高麗茶碗の一であるが、日用の食器として⁽²⁾大量生産され使い捨てられたもののように、本国（朝鮮半島）には伝存しない。日本では「井戸茶碗 是天下一ノ高麗茶碗」（『山上宗二記』天正十六年成立）と評され⁽³⁾、「惣テ茶碗ハ唐茶盃スタリ、當世ハ高麗茶盃、瀬戸茶盃、今焼ノ茶盃迄也」（同上）と記されるように、利休の時代に最も重んぜられた⁽⁴⁾。筒井順慶旧蔵で豊臣秀吉の手に渡ったという井戸茶碗が小姓の失態で割れてしまった時、居合わせた細川幽齋が伊勢物語の歌を踏まえ「筒井筒五つに割れし井戸茶碗とがをば吾に負ひにけらしな」と詠んで事なきを得た、といういささかできすぎた歌徳譚があるが（後述）、秀吉が鍾愛した茶碗としても有名である⁽⁵⁾。この茶碗が「井戸」の名を冠して呼ばれる理由については、地名説、人名説など諸説行われてきたが⁽⁶⁾、いまだ定説を見ない。拙稿はこれら通行諸説を概観し、その名義について語学的視点からの検討も加えつつ、抛るべき一説は何かについて、考証しようとするものである。

一 なぜ「井戸」か — 地名由来説

「井戸茶碗」という語が用いられた最も古い記録は、次に掲げる茶会記のものである。

爐 ノカヅキ釜 後ニ手桶 井戸茶碗 なつめ 備前水下

〔津田宗及茶湯日記〕—天正六（一五七八）年十月廿五日朝

それまで茶会では天目など唐茶碗を用いるのが正式であったが、いわゆる「佗数寄」の理念の深化とともに、朝鮮半島で粗製された陶器がこの頃から用いられるようになった⁽⁷⁾。当時の茶会記の記事を仔細に見ると、唐茶碗に関しては、「天目」「曜変」「油滴」「灰カヅキ天目」「黄天目」「塗天目」「伊勢天目」のように名称や異称を記すばかりだが、高麗物については「かうらい茶碗」「三島茶碗」「こゆみ茶碗」「井戸ちゃわん」などと、必ず上位概念を示す「茶碗」の語が添えられ、略記されることがない。これらの茶碗を用いることがなお新しい流行であり、名称表記の面でも区別する意識が作用したからであると思われる。

茶々ワンニタツ

〔宗達他會記〕—天文十九年二月十六日朝

茶碗 常之

〔宗及自會記〕—天正二年七月一日不時二

などと記される場合の「茶碗」も、「天目」ではなかったことを意味しており⁽⁸⁾、高麗茶碗か「今焼き」の新しい茶碗を用いたことが前提になっている⁽⁹⁾。

さて、そのような高麗茶碗の中で、井戸茶碗については、ひととき評価が高いこともあり、名義の解明を試みた考説が古来多いものの、いまだ決定的な一説を見ていない。茶会記等に記される茶碗の名称を分類すると、生産地等の地名を示差的に特記したもの、所有者や生産者の名前を示したものの、制作方法やデザインなど、形式上の特徴にちなんだもの、この三類に分かれる。「備前茶碗」「伊勢茶碗」「瀬戸茶碗」などが地名、「松本茶碗」「志野茶碗」「善好茶碗」などが人名、「染付茶碗」「今ヤキ黒茶碗」「こふくらの茶碗」「人形茶碗」などが制作方法や形状にちなんだ呼称である。

「井戸茶碗」の名称に関する学説も、大きくこの三種に分かれる。まず、地名説について見ると、インド、朝鮮、日本、の三説がある。

印度 俗呼^フニ井戸^ト一蓋^シ字^ノ誤^{ナラン}也。本^{以テ}自^下三印度^一來^上爲^レ名^ト。然^ハ高麗所^ノ造^ル盃^モ亦通^テ謂^フニ之^ヲ印度^ト。

〔三谷良朴『和漢茶誌』卷三 享保十三年筆写本 国立国会図書館古典籍資料室蔵 原文句点なし〕

井戸茶碗ノ事、或人ノ云印度ヨリ出ツユエニ名ク。印度は天竺ノ異名ナリ。古來井戸ト書クハ非也ト。稻子話ニ此説非也。此茶碗昔京都將軍時代カ井ノ中ニ埋モレテ多ク有リシヲ掘出セシヨリ井戸茶碗ト云。本高麗茶碗ナリ。又説ニ形チ井ニ似タル故井戸ト云ハ大ニ誤ナリト。

(松岡玄達『結耗録』卷之下―十オ・ウ 宝曆九年 原文句読点なし)

戦国の頃、南九州の種子島に鉄砲という武器が渡来し(天文十二年、一五四三)殆ど同じ頃(時期は定かでないが鉄砲伝来以前の五一六〇年間と思ふ)北九州怡土に平和のシンボルともいふべき茶碗が渡来し、それぞれ地名を取って一つは種子島となり、他の一つは井戸茶碗となった奇しき因縁を、とても面白いと思うのである。

(中川竹治「仮説井戸茶碗の由来」―『日本美術工芸』四一一、昭和四十七年十二月)
又一説高麗國の所の名に井戸と云あるとも

(『和漢雅品銘器秘録』上卷 江戸時代中期写本 国立国会図書館蔵)

國主黒田長政朝鮮ヲ征シテ還ルノ時、朝鮮ノ人從テ歸化スルモノアリ。更名シテ八藏トイフ。又肥後ノ國主加藤清正ニ從ヒテ歸化スル者アリ。更名シテ新九郎ト云フ。俱ニ高麗ノ韋度^{キョト}地名ノ人ナリ。

(黒川真頼『工芸志料』卷三―陶工―高取焼、明治十年十二月)

〔伊東楨雄氏が〕井邑こそ井戸の故郷と確信されていたことを、嗣子成憲氏からうかがっている。わたくしは伊東氏の井邑説をうかがったおり、「邑」の古文が「戸」に大変似ていることを思い浮かべた。……〈中略〉……とてつもないことながら、この誤読説すら考えたわたくしで、井邑周辺にはかなりの期待を抱いている。

(香本不苦治『朝鮮の陶磁と古窯址』雄山閣昭和五十一年一月)

インドについては、明治以前は「天竺」と称するのが通例であり、また仮に「印度」だったとしても「インド」と「ゐど」では音韻の面でも通じがたい。日本の「怡土」(現・福岡県糸島市)説は、外国人宣教師の漂着地と貿易の荷揚港を関連付けたものであるが、「怡土」の文字で茶碗名を表記した例もなく、また傍証となる船載の記録があるわけでもない。上記二説ともに首肯できない説である。一考に値するのは、朝鮮の地名説である。井戸茶碗よりも時代はかなり下るが⁽¹⁰⁾、高麗茶碗の一種「こもがい」は、慶尚南道の地名「熊川(웅천)」を訓読みしたものと「おどり」、「ゐど」もその可能性があるからである。「熊川」は、この茶碗を積み出した港名とされるが、「井戸」地名説は、右に見るとおり、この茶碗を産した土地の名であると主張する。しかしながら、

井戸と言う名称に対しても、日本の研究者たちの中には韓国の地名に由来したとの説もある。其の中でも全羅道井邑の説である。しかし、筆者が調査した結果、井戸^レと言う地名は韓国には全然見あたらないのである。

(崔楨幹「井戸郷窯からの報告(1)」——井戸茶碗生産地に於ける新研究——)——日本陶磁協会「陶説」三九四昭和六十一年一月)と言われるように、朝鮮半島に「井戸」に相当する地名は確認できない。右引香本氏の「邑」「戸」混同説も文字の上で点画が異なり、「期待」から生じた無理な説であると断ぜざるをえない。朝鮮地名に「井戸」が存在しないことを言明した崔氏だが(右引論文)、同じ地名説の立場から、以下のような自説を展開する。

驚く事にはこの辰橋面沙器村の俗名が 새미골 (セミコウル) と呼ばれていることである。(セミ)とは韓国語で泉(井戸)、(コウル)は里(郷)を表わす語源によっているからである。即ち、(セミコウル)は(井戸郷)なのである。この謎が四〇〇年後の——今日に至って解けたのである。

(崔氏前掲論文 引用者注)崔氏原文では*印のハンゲルは古体で表記されている。この読みについては本字石川裕之准教授のご教示をうた

「セミ」が韓国語で井戸のことだから「(セミコウル)は(井戸郷)であると主張するが、「(セミ)は漢字「泉」を由来とする字音語であり(ハンゲルで「泉」は「샘」と表記)、「井戸」については、「우물(ウムル)」という固有語が別に存在した。もし「(セミコウル)」が名の由来であったのなら、「泉茶碗」と称したはずである。「泉」と「井」とは、漢字としても、形音義すべてにわたって別異の語である(「泉、自縁切。山水之原也。」「井、子郢切。穿地取水也。」「大廣益會玉篇」卷廿)。すなわち結論から言えば、「새미골」は「泉郷」ではありえても、「井戸郷」とまでは言えず、牽強附会の解と言わざるをえないのである。

二 人名由来説の検討

井戸茶碗の「井戸」の由来を人名に求める説も少なくない。以下のように、茶碗の製作者、茶碗を将来した者、茶碗の所有者などに関連付けよ

うとする。

往昔筑前高取焼元祖朝鮮人之由工上手のよし、名井土新九郎といふ。朝鮮在名とも云。

〔和漢雅品銘器秘録〕上巻 江戸時代中期写本 国立国会図書館蔵

井戸手の茶碗は井戸三十郎の朝鮮より取て來りて太閤に進ぜしを秘藏有て常に井戸の茶碗と召れし故に其形ちなるを井戸手と申也

〔新井白石〕『神書』卷三 宝永二年

井戸覺弘 十郎 若狭守

・〔前略〕・朝鮮陣のときも定次（筒井順慶の子）に従ひて肥前國名護屋にいたり、岐阜宰相秀信が手に屬して朝鮮に渡海し、武功をあらはし、彼地にをいて鞍及び高麗焼の茶碗十箇を得たりしを、凱旋の後數年を経て彼茶碗五箇をもつて秀頼にまいらするの處、東照宮ひとつを返したまひ、覺弘が得たるところのものなればとて、井戸と銘せられてこれを賜ふ。

〔寛政重修諸家譜〕卷一〇九四―井戸氏

朝鮮征伐の時、井戸左馬助將ち來たりと、屋ノ茶わんニツ 秀吉公へ献ず。何某所持なれば井戸と名付られたり。

〔菊岡沾涼〕『本朝世事談綺』卷二―器用門「井戸茶碗」天保七年 原文句読点なし

世に、井戸茶碗と云ふものは、其の昔、井戸對馬守といふ人が、始めて、高麗から、將つて來たものであるとも云ひ、或は、又、代々同家に秘藏せられて居つた茶碗の一つであつたが故に、其の名が出たのであるとも云ふが、兎に角、斯の手の茶碗を、井戸と名付けたのは、井戸對馬守の苗氏から出たことは、事實である。乍併、此の井戸對馬守其の人の傳記は不明である。熟れ、足利時代の末か、遅くとも、豊太閤時代の人であつたかと、考へられるのである。

〔今泉雄作・小森彦次〕『高麗茶碗と瀬戸の茶人』雄山閣 大正十五年七月

鎌倉ノ後時代ニ井戸佐馬之助ト云武士ノ所持シタル高ライヲ井戸ト云。故人申傳ヘナリ。其手ヲ皆井戸ト云ナリ。

〔伊丹信太郎〕『高麗茶碗次第録』東京美術青年会 昭和十二年 原文句点なし

宗及日記弘治四年六月二十二日井上石見會があり、而もその井上石見守は高麗茶碗を所持してゐるのである。井上の上と、井土の土は寫本の際頗る誤り易い字であつて、或は井上石見守は井土石見守でないかとも考へた

〔藤田幸之〕「井戸茶碗の名称」―学芸書院「焼もの趣味」第四卷三号 昭和十三年二月

井戸の名はすでに天正ごろには生じているが、これは奈良興福寺の寺臣井戸氏所持の一碗が当時名高く、それから起ったものである。この井戸の起りである茶碗は、のちに筒井順慶に伝わって、深いので筒井の筒茶碗といわれ、略して筒井筒とよばれ、井戸の中の名碗とされている。

〔満岡忠成『茶道美術全集2 茶碗 朝鮮』解説 淡交社 昭和四十五年四月〕

「井戸」を地名ではなく氏名と解釈し、個人ないし家の名に関連づける所説であるが、「井土」の誤字と言ったり「何某所持」「故人申傳へナリ」のように典拠を明示しなかったりで、不確かな説が多い。とりわけ今泉・小森説は人物を半ば特定しながら、同時にそれはどこの誰だかわからないと主張しており、およそ説得力がない。

右諸説のうち、一次史料として価値の高いのが『寛政重修諸家譜』である。それによれば、井戸若狭守覚弘が秀吉の朝鮮出兵の際に渡海し、茶碗十箇を得て帰国、そのうち五箇を秀頼に献上したが、家康がそのうちの二箇を、覚弘が入手したものととして「井戸」と命名し、下賜したということである。この記録が、井戸茶碗の名義を決定的に示す証拠となると考えたいところであるが、

井戸茶碗は朝鮮征伐の時井戸左馬助と云人取来りしにより井戸と名付と近世事談といふ書にあれど非なるべし。朝鮮征伐已前、利休茶湯百會之記に筒井井戸茶碗と出たり。

〔関竹泉『茶話真向翁』享和三年 駒井兼郵編『鶯宿雜記』卷百十三所収 原文句読点なし〕

と古くから指摘があるように、戦国時代の茶会記にすでに「井戸茶碗」の名が記されることと矛盾する。名前に引き付けて逸話が創作され家譜に掲載された可能性が高い。この井戸家の系譜を見ると、同じ名前前の人物が複数名あり、若狭守覚弘の子良弘は「左馬助」と号し、その子覚弘、孫の良弘、曾孫の典弘いずれも「三十郎」と名乗っている。また最初の覚弘の曾孫に当たる良弘は、「対馬守」を務めた人でもある。すなわち、右に列挙した井戸茶碗人名由来説の多くが、この家譜に掲載された井戸家の所伝に関係しているらしいことが知られるのである。いずれにせよ、明確に言えることは、「井戸茶碗」の語の初出が、冒頭述べたように、天正六（一五七八）年であり、文祿慶長の役（いわゆる朝鮮出兵、一五九三〜八）よりも早いのであって、井戸氏がこの茶碗を朝鮮から将来したという説は成立しがたい。

藤田氏の「井土石見守」説は、「管見の範囲では永祿以前の確かな茶湯日記等に、高麗茶碗を所持する井戸何某は、遺憾乍ら発見出来なかつた」

ことから苦肉の策として考えられたものであり、「井戸茶碗の名稱は、矢張り大和の井戸氏に縁由する名であると考へるが、なほ未だ確言出来る時期ではな」い（同氏前掲論文）と言ひ、自説の限界を自ら認められている。

満岡氏の説は、井戸覚弘の一族が大和国添上郡井戸を本貫とし、大和を知行した筒井順慶の麾下に属していたこと（『寛政重修諸家譜』）と、興福寺の僧、英俊の日記に「井戸茶碗」の記事があることを関連づけて案出されたものであろう。英俊『多聞院日記』に以下の記事が見える。

キト茶ワンヲ吸茶呑トテ五人シテ引アイ打ワリ無興ノ時、細川兵部大夫哥ニ

ツ、キツ、五ツ、ニワレシキト茶ワントカラハタレカライニケラシナ

ト被讀了、此比關白殿ハキカイニスカレタリ

（天正十六年二月九日の項）

この興福寺の記録をもとに、江戸時代には、以下のように説話として再構成される。

世に筒井の井戸茶碗と云しは南都の水門あるし善玄と云わびの持し高麗成を順慶御所望ありてやがて秀吉へ上り侍し也。それをいかがして御前にてわられて御氣色もそこねし時長岡幽齋居會給ひての狂歌

つつあつ、五つにわれし井戸茶碗とがをばたれにおひにけらしな

と申上られければ、殊外の出来哥とて機嫌なをらせ給とぞ。

（久保利世『長闇堂記』江戸時代前期 原文句点なし）

満岡氏が「茶碗は、のちに筒井順慶に伝わって」と記す根拠となったのも、右『長闇堂記』にその名が記されているからである。しかし、私見によれば、ここに筒井順慶の名が出るのは、後世の創作であった可能性が高い。なぜなら、『多聞院日記』は興福寺の僧による記録であり、もし「寺臣井戸氏所持の一碗が当時名高く」、「のちに筒井順慶に伝わっ」（ともに満岡氏論文）たということが事実であったならば、井戸茶碗の記事を書いた際に順慶のことを書き漏らさぬはずがないからである。というのも、筒井順慶は大和郡山城主だった人であり、しばしば同じ『多聞院日記』にその名が見え、この「キト茶ワン」の記事が書かれる四年前の天正十二年に他界しており、茶碗が当時有名なものだったならば、旧所有者たる

順慶の名を必ず書いたと思われるのである。

逆に言えば、右に引用したように、日記の原記録に順慶の名はなかったのであり、記事の要点は、細川幽齋が狂歌を詠んだこと、秀吉がその歌に感服したことの二点だけだったが、説話を潤色するために後世の人が、歌の初句に「筒井づつ」とあることに着目し、「順慶御所望」といった内容が追加されていったものと考えられる。井戸茶碗が井戸氏所有の茶碗として知られ、それが順慶にわたったという満岡氏の仮説は、以上の考察からは認しがたいのである。

そもそも、茶碗の旧蔵者等に関する伝来の記録がないこととしたい、井戸茶碗の名が人名起源ではなかったことを示すものである。もう一度「井戸茶碗」の初出文献である『山上宗二記』の文を見よう。

一 井戸茶碗

是天下一ノ高麗茶碗、山上宗二見出テ名物ニナル、關白様ニ在リ、

(「山上宗二記」―茶碗之事)

と記されている。これによれば、井戸茶碗は山上宗二が茶器の名品として初めて評価し、世に広まったものということになる。他の茶碗について『宗二記』は、

一 珠光茶碗 惣見院殿御代火二入失

唐物茶碗也 ヒシホ 色篋目に十七在リ、宗易ヨリ三好實休へ渡ル、代千貫

一 善好茶碗 昔紹鷗・道陳所持ス、數奇道具ノ由、堺宗及ニ在リ

(いずれも「茶碗之事」)

のように、旧蔵者や所有者の移動について仔細に記している⁽¹⁾が、井戸茶碗に関しては、「關白様」所有であることを記すのみである。もし満岡氏が言うように、早くから「名高」い品であったならば、ここに詳しい来歴が書かれたであろう。しかし、そうではなかった。すなわちこの茶碗は、人名が冠せられて呼ばれるような名品だったのではなく、本来なら貴顕に用いるのも憚られるような粗末な碗だったのであり、それを宗二が「見出テ」用いたのが始まりであった。これを「天下二」とした茶人たちの心は、現代まで変わることなく受け継がれた。たとえば、以下の文にその評価が言い尽くされている。

それは朝鮮の飯茶碗である。それも貧乏人が普段ざらに使ふ茶碗である。全くの下手物である。典型的な雑器である。一番値の安い並物である。作る者は卑下して作ったのである。個性等誇るところではない。使ふ者は無造作に使つたのである。自慢などして買った品ではない。誰でも作れるもの、誰にだつて出来たもの、誰にも買えたもの、其の地方のどこで、も得られたもの、いつでも買えたもの、それが此の茶碗の有つありのまゝな性質である。

それは平凡極まるものである。土は裏手の山から掘り出したのである。釉は爐からとつてきた灰である。轆轤は心がゆるんでゐるのである。形に面倒は要らないのである。数が澤山出来た品である。仕事は早いのである。削りは荒つっぽいのである。手はよごれたまゝである。釉をこぼして高臺にたらしつたのである。室は暗いのである。職人は文盲なのである。窯はみすほらしいのである。焼き方は亂暴なのである。引つ附きがあるのである。だがそんなことにこだわつてはゐないのである。又ゐられないのである。安ものである。誰だつてそれに夢なんか見てゐないのである。……〈中略〉……

だがそれでいゝのである。それだからいゝのである。それでこそいゝのである。さう私は讀者に言ひ直さう。坦々として波瀾の無いもの、企らみの無いもの、邪氣の無いもの、素直なもの、自然なもの、無心なもの、奢らないもの、誇らないもの、それが美しく無くして何であらうか。謙るもの、質素なもの、飾らないもの、それは當然人間の敬愛を受けていゝのである。

（柳宗悦『茶と美』「喜左衛門井戸」を見る 竹野書店昭和十七年十一月）

この茶碗の呼称に人名が関係するようになったのは、このような高い評価が定着した後である。右の「喜左衛門井戸」をはじめ、「竹屋井戸」「柴田井戸」（口絵写真）「有楽井戸」「細川井戸」など、いずれもその所有者にちなむ呼び名である。

三 「井戸茶碗」呼称の由来は何か

しからは、この茶碗の名称をどう理解すべきか。「斗々屋茶碗」のように由来不詳のまま閑却すべきか。ここで、高麗茶碗の名称をすべて掲出してみる。以下の通りである⁽¹²⁾。

雨漏——雨漏りのような景色から

柿の蒂——伏せた時の姿が柿の蒂に似ているから

狂言袴——狂言師の袴の丸文に似る象嵌文様があるから

熊川——朝鮮慶尚南道熊川港から積み出されたから

刷毛目——刷毛で器胎に白化粧土を塗りつけたから

伊羅保——器肌がいらいらいぼいぼしているから

堅手——焼き上がり・土味の堅い感じから

粉引——粉を吹き掛けたような姿から

斗々屋——魚屋とも書き、由来は諸説あり

三島——白象嵌の文様が三島神社の暦の文字に似ているから

(日本放送出版協会編『茶陶歴史と現代作家一〇一人』資料編「茶陶事典」二〇〇二年四月)

これらを見ると、「熊川」「斗々屋」の二つを除けば、すべて茶碗の外形的特徴を名義としていることが分かる。井戸茶碗の「井戸」も、姿勢の特徴に由来する呼称であったとまず考えるのが自然である。右に引用した同書では、以下のように記す。

「井戸」の名は、形態に由来する。現代の井戸は、垂直状に地中深く掘り下げられるが、考古学の発掘調査で明らかになった近世の井戸は、縁が大きく摺り鉢形になっており、まさに井戸茶碗の形状を呈する。

(竹内順一「茶の湯の流行と茶陶の歴史」日本放送出版協会『茶陶歴史と現代作家一〇一人』二〇〇二年四月)

先に掲げた高麗茶碗の命名の傾向からすると、右説が最も穏当な見解であったと考えられよう。ただし、茶碗は多かれ少なかれ摺鉢形になっているが、なぜ井戸茶碗にその名が限定されたのかという問題が残る。それを解く鍵は、井戸茶碗特有の形状にあると見られる。

……大方のものは、高臺内迄カイラギがあり、豊付きの部分(高臺の底面)にも目跡を残して釉薬がかけられてゐる。大體以上の様な形を井戸風、井戸形と云ふことが出来る。……(中略)……

一般にカイラギとは、高臺脇から高臺内面に互つて現はれる一種の釉薬の窯變を指すが、更に委しく云ふならば、このカイラギの語には二通りの意味がある。……(中略)……井戸茶碗の高臺と、高臺脇の轆轤仕事は、恐らく急速度の轆轤の廻轉と、稍々大きい抵抗力のある甍の技術を必要としたものと思はれる。この急速度の廻轉に加へて、井戸茶碗特有な粗筋な胎土と、粗荒にも近い特殊な甍の技巧とが、高臺脇の胎土の肌荒々しくも見える程な一種のササクレを作るのである。この荒削りのササクレを先づカイラギと云ふ。しかるに高火度の窯中にあ

つて、このササクレを持った胎土の肌に、自然に溶けて流れた釉薬が溜り、ササクレの蔭にかくれた氣孔が凝固して、眞珠を列べた様な美しい珠を織りなすのである。これは一種の窯變であり、これを以て一般にカイラギと云ふ。

(檜崎鐵香『井戸茶碗』全国書房昭和二十二年十二月)

と言われるように、井戸茶碗第一の特徴は、「眞珠を列べた様な美しい珠を織りなす」カイラギ(梅花皮)であり、その形姿があたかも「井戸」の形を連想させたのである。古代の井戸では、挿鉢型に地面を掘っていつて湧水を求める素掘り式のものがよく見られるが⁽¹³⁾、それは「井戸枠」もたず、ただ地面を掘っただけの井戸」(秋田裕毅『ものと人間の文化史 一五〇 井戸』法政大学出版局二〇一〇年三月)であり、関東地方に遺構が多く検出されているように、地表からメートル前後のところ、砂礫層の崩落を防ぐため、黒色土と数センチ大の平石を混ぜて衝き固めた形状を呈する(秋田同上書)という⁽¹⁴⁾。その歴史は古く、『枕草子』にも「井は、ほりかねの井」(二七二段)と紹介された「堀兼井」(埼玉県狭山市大字堀兼)の遺構などを見ても、石が組まれており、その様子はまさにカイラギのようである(稿末写真参照)。このように、底面や法面を石組みにした井戸の構造が、高台附近にカイラギのある茶碗の命名に連想を与えたものと考えられる。これに加えて、

井戸四段の轆轤目については、古來井戸四段と云ふ言葉がある。それは茶碗の胴の表面に現はれてゐる四段の節を云ふのである。井戸茶碗にあつては、通常用ひる番茶茶碗の胴の如く、なめらかな面に仕上げられることはなく、三段の荒地の面を残して挽き上げて居り、更に高臺脇を篋で削り取つた跡が一段残されてゐるが爲め、これを四段の節と云ふのである。井戸茶碗が平凡の形であり乍ら、種々様々な變化に富むのは、この荒削りの節を持つからであつて、井戸茶碗の作行と景色の美しさは、またこゝに藏されて居り、他に比類のない特徴を形づくる。實際陶工にこの大きさをもつ茶碗を四段に挽き上げさせることは、中々至難な技術であると云ふ。

(檜崎『井戸茶碗』)

と言われるような粗く削られた器肌が、地面に素掘りされた井戸の法面の形状を連想させたこともあるいは関係したかもしれない。地面を垂直に深く凹筒形に掘っていく井戸と違い、素掘りの井戸は、初めは広く地面を掘り、掘る面を小さくしながら階段を下りるように水脈に近づいていく原始的な工法による(秋田前掲書)。「四段の節」と「高台附近のカイラギ」という景色をもつ茶碗に「井戸」の名を冠したのは、素掘りの井戸を多く目にしたであろう往時の人々にとっては自然な発想であつたと考えられる⁽¹⁵⁾。

先ほど掲げた高麗茶碗で言えば、「雨漏」「粉引」「刷毛目」など器面の文様に取意したものが多かったが、中にあって「柿蒂」は、器全体の外形的特徴を捉えた名であった。井戸茶碗もこれと同じ命名法であったと言いうことができる。

おわりに

以上、井戸茶碗の名義について、通行諸説を検討し、どう解釈すべきかについて、考察を試みた。段丘状に広がった楕鉢形の底辺にゴロタ石や砂利が敷き詰められている素掘り式井戸の形状に酷似していたことが命名の由来であったと結論づけた。

ちなみに「井」という漢字は、字書によれば本字が「井」であり、「井」は「井に同じ」でもある（『康熙字典』）。要するに両字は同じ字である。『類聚名義抄』にある「井井谷正 子郢メ井 井妙美―シミツ」（僧下部）という記載は、「井井 谷正」云々とあるべきところである。「井」が俗字、「井」が正字という、異体字の関係だということになる。そして「井」の漢字義は「穿地取水也」（先引『大廣益會玉篇』）であったが、もう一つ「投物井中聲」（『集韻』）という意味があった。井戸の中に物を投げ入れれば大きな水音が発生する、これが「井」の国訓となった「どんぶり」の起源である¹⁶。「井」の字に水音の意味を汲み取ってきた歴史は古く、平安時代末期の『江談抄』にすでに次のような例がある。

延喜御時、渤海國使二人來朝。其牒狀爾此兩字各篤使二人姓名。紀家見之、雖未知文字、呼云「井、木のヅブリ丸、井、醫師のザブリ丸、參レと喚、各應令參云々。

ここに「井」「井」と「どんぶり」を関係付ける先蹤を見てよいであろう。井戸を意味する漢字、「井」が「投物井中聲」の意味において「どんぶり」と訓まれたということが理解できる。ところで、言うまでもなく国語で「どんぶり」と言えば、擬音の情態副詞であると同時に、「どんぶり鉢」「どんぶり茶碗」を意味する名詞でもあった。「どんぶり」は「茶碗」のことであり、文字の上では「井」であり、すなわちそれは「井戸」でもあったということになる。「どんぶり」という語が「茶碗」の意味で用いられるようになったのはいつ頃のことか、詳らかではないが、

○料理に用る諸道具字盡

包丁 魚箸 魚板 …… 〈中略〉 …… 盃 各盞 壺皿 平皿 井どんぶり 猪口 湯續 重箱 提盒 ……

（苗村丈伯『男重寶記』卷四 元禄六（一六九三）年刊）

のように江戸以降のことである。「井戸茶碗」と「どんぶり」を同一視し、茶碗の名義を「どんぶり」を介して説明しようとする向きもあるが¹⁷、二種の語を混同してはならない。「井戸茶碗」が貴顕の茶会において用いられた高価な茶器であったのに対し、右引『男重寶記』「料理に用る諸道具字盡」や

盃あらひとて井に水を入、猪口數多浮めて詠め楽しみ、蕎麥屋の皿もりも井となり……

（豊島屋十右衛門『寛天見聞記』——『燕石十種』卷五所収 原文句点なし）

などに見るように、「どんぶり」はもっぱら料理や食事に供せられたもので、「猪口數多浮めて詠め楽し」めるほど、かなり大きなものであったようで、まったく別物と考えるべきである。「どんぶり」なる語が茶会記の類に用いられた形跡はないのである。

しかし、「井」「井」と、水音を表す副詞「どんぶり」の文字・語彙としてのつながりは理解できるのだが、茶碗の類をなぜ「どんぶり」と称するようになったのかについては、謎が残る。以下は推測の域を出ないが、附言したい。

京都市伏見区石峰寺の近くにある井戸は「茶碗子の水」と呼ばれ、『都名所図会』にもその名が記される有名なものであったが、井戸に「茶碗」の名がついたのは、あるいは「井戸茶碗」という語とその由来への理解が関係していた可能性がある。本論で述べたように、素掘り井戸の連想から「井戸茶碗」という呼称ができ、それが広く知られるようになった。そしてそのことで、「井戸」と「茶碗」との意味的連繋が深まり、逆転した「茶碗のような井戸」という意味で「茶碗子」といった井戸の名称も生じたのであろう。いっぽう先述したように、「井戸」は情感副詞「どんぶり」にも関係があり、その連想から、食事用の大きめの茶碗を、半ば隠語的に「どんぶり」と称するようになったのではあるまいか。「井戸茶碗」が最初にあつて、「井」の字義、副詞「どんぶり」を介して、名詞の「どんぶり」が派生したと考えられる。繰り返すが、あくまで「井戸茶碗」は茶会用、「どんぶり」は料理や食食用であつて、交わることのない別物である。単語としても、前者よりも後者がおよそ一〇〇年遅れて現れ、先後関係が明らかである。「井戸茶碗」の前に茶碗を意味する「どんぶり」の語があり、それを契機として「井（どんぶり）」＝「井戸」の茶碗という呼び名ができたとする解釈は誤りであると考ええるゆえんである。

注

- (1) 岡本方円齋『茶の湯百首』(享保十四年)に「茶の味は一井戸二樂三唐津古よりも云ひ傳へたり」とあるのが最古か。
- (2) 申翰均『井戸茶碗の謎』(バジリコ二〇〇八年三月、原著は韓国語「私たちの茶碗の物語」カヤネット出版、二〇〇五年六月刊)は、陶芸家の立場から、高台、釉薬、カイラギ、轆轤目などについて論じ、井戸茶碗が日用雑器ではなく民家の祭器であったと主張する。阿部誠文「井戸茶碗の探究」(九州女子大学紀要自然科学編)第四五巻四号、二〇〇九年)のように全面的にこの祭器説を支持する立場もある。しかし、申の論考は、「民家用の祭器については、それが確立した十八世紀までは記録がないため、現在残っている遺物を見て推定するしかありません」(同上書四十二頁)と自ら述べるように、すべて想像・推理にもとづくものであり、にわかには賛同できる説ではない。「礼記」を踏まえ「祭器はある期限がきたら、こなごなに壊してひとつのところに埋めるという習慣があったのです」などと述べる(同上書三十五、四十二、四十五、五十七頁)が、『礼記』本文を見ると「祭器敝則埋之」(曲礼上)と書かれており、祭器が破損したら土に埋めよ、と言っているだけで、「こなごなに壊す」とは記していない。「礼記」の記載により、もし申の言うように、井戸茶碗が祭器であったならば、割れたり欠けたりした状態で遺物が多く出土してもよいはずである。しかし、その事実はない。以上により、拙稿では、申説は採らず、井戸茶碗が日用の雑器であったという従来の考え方に拠って論を進めることにする。
- (3) 本文中に引用した茶会記の本文は、おおむね千宗室編『茶道古典全集』(淡交社昭和三十三年十二月)に拠った。
- (4) 谷晃「いわゆる『高麗茶碗』の受容に関する一考察」(『高麗美術館研究紀要』一、一九九六年十一月)に高麗茶碗の使用回数が紹介されている。たとえば「今井宗久茶湯日記抜書」天正十五年正月三日の項に「井戸茶碗ニテ御茶玉ハリ候、四十石ノ御茶ナリ、宗易手前ニテ被下候」とあり、秀吉が大坂城で利休の点前により井戸茶碗で喫茶したことが記されている。
- (5) 元禄時代の『茶話指月集』に「秀吉公此茶碗御自愛候」と記す。
- (6) 「井戸茶碗」の名義については、地名説、人名説以外にも、以下のような説がある。釉薬を意味する朝鮮語「衣土」に由来する——加藤灌覺「朝鮮陶磁零話」(学芸書院「焼もの趣味」第三巻第二号 昭和十二年二月)。高台を意味する「キド」にちなむ——赤堤十三「井戸」(学芸書院「焼もの趣味」第四巻三号 昭和十三年二月)。いずれも、根拠なき臆測にもとづく説であり、ここでは注記するにとどめる。
- (7) 谷晃前景論文など参照。「化數奇」という語は、山上宗二記「古人之云茶湯名人成テ後ハ道具一種サヘアレハ化數奇スルカ專一也」のように当時の茶道の重要なキーワードであった。
- (8) 松山米太郎「評註 津田宗及茶湯日記上」(津田宗及茶湯日記刊行後援会昭和十二年九月) 頭注参照。天目の場合は、「天目、茶タツ」(『宗達他會記』——天文廿一年十二月六日朝)などと記されている。
- (9) 「御茶わん 井戸」(『北野大茶湯之記』——天正十五年七月)「茶碗今ヤキニ道具仕入テ」(『宗湛日記』——天正十四年十二月廿七日期)「茶碗ハコヨミ也」(『同日記』——文祿三年——三月五日昼)のように、「茶碗」と記してからその種類を記した例も数多く見られる。
- (10) 谷晃前景論文など参照。
- (11) 「宗二記」は、茶碗以外の、壺、釜、水差しなどについても、詳しく来歴を記している。とくに「大壺之次第」では、壺の命名の由来についても紹介している。
- (12) 高麗茶碗の一手「金海」は、引用した文献に立項されているものの、由来は記されていない。御本茶碗の一種で、慶尚南道の「金海窯」に発注して焼かせた茶碗として知られている。
- (13) 播鉢形の巢穴を掘るアリジゴクは、方言異名の多い虫として知られるが、その一つに「いどほり」「いどほりむし」(千葉県、静岡県、愛媛県)という呼称があ

る（佐藤亮一編『日本方言大辞典』小学館一九八九年三月）。ここに述べる素掘り式「井戸」を掘る虫の意味に理解できる。

(14) 井戸の底に木炭や礫石などを並べることが、湧水を飲料水として利用するための浄化装置でもあった。その設備は、奈良時代末から平安時代にかけての橿原遺跡（奈良県橿原市）にすでに見られる（堀越正雄『井戸と水道の話』論創社一九八一年二月）。

(15) 天目茶碗は、茶会記では「天目」とのみ記されるが、その種別については、前項に修飾語を附加して「塗天目」「灰カツキ天目」「黄天目」などと表わされる。その一つに「あけのいと天目」（『利休百會記』一九月十三日朝）と呼ばれる茶碗がある。赤身を帯びた「井戸天目」のことだと解説されている（千宗室編『茶道古典全集』第六巻頭注 淡交新社 昭和三十三年二月）が、詳細は不詳である。案するに、「井戸天目」とは、天目茶碗の一種であるが、前項の「井戸」は、「黄天目」「塗天目」などと同様の形容語であったと考えられ、井戸茶碗に似た景色を持つ天目茶碗という意味であったと考えられる。

(16) 小学館『国語大辞典第二版』「どんぶり」の項補注にも『集韻』の注を引き「名詞ドンブリに『井』があてられたのは、井戸に物を投げ入れたときの音をさす副詞ドンブリに対応する漢語が『井』であったことによるか」と記す。

(17) 以下のような説がある。「朝鮮から誠に結構な鉢、即ち、どんぶり鉢が將來された。丁度抹茶の御茶碗に具合のいゝ立派なものだ。勿論その頃已に「どんぶり」なる名は生れてゐたものとしやう。／＼そこで此の結構なお茶碗を如何に命名すべきかについて随分苦心したものであらう。ところが或る物識りが、「井（どんぶり）は字引をひいて見ると「ゐど」と讀む。單に「結構な井」「朝鮮の井」でも具合が悪るからうから「井戸の茶碗」と云つたらよからう」と云つた様なことに起因するのではあるまいか。」（山田萬吉郎『井戸茶碗を語る』学芸書院「焼もの趣味」第三卷十一号 昭和十二年十一月）



堀兼井（埼玉県狭山市堀兼神社内） 石組みがカイラギのように見える
令和元年12月27日 筆者撮影



大蔵館（平安時代末期の武士の居館）跡から発掘された井戸の石組（埼玉県嵐山町）
写真提供 嵐山町教育委員会